

# ニホンアマガエル



(撮影：桐原真希)

戸構にて

## ■嫌いな人ごめんささい

毎年7月になると、我が家の庭にやってくる小さな豆蛙、その数、数百匹。カエル嫌いな方には、強烈な写真かもしれません、どうかお許し下さい。これは子供たちが夢中になって捕まえた子蛙の一部です。上陸仕立てほやほやで、大きさは指先ほど。極小のニホンアマガエルたちは、田んぼから幅5mの道路を超えて、桐原家の雑草だらけの庭にたどり着きました。しかし、こんなに沢山いても、生まれてから大人になっても結婚できる確率は約1〜2%。この子蛙たちも多くが何かの餌になるかもしれません。

## ■日本という名が付いていても

ニホンアマガエルという国の名前が付けられている蛙ですが、思いの外その分布は広く、日本全国はもちろんのこと、朝鮮半島、中国北部からロシア沿岸まで生息しています。国内では、田んぼがある環境でこそ生きて行ける種類と言ってもいいかもしれません。アマガエルのオタマジャクシが田んぼ以外で泳いでいるのを見たことがないので、まさに稲

作文化と契約を結んでいるかのような繁殖方法に、人と生き物たちの巧みなつながりを感じます。

## ■害虫駆除係り

アマガエルなどの田んぼが好きな蛙たちは、実に様々な虫たちを食べます。口に入る小さな動く物体だったら内容問わず。ウンカやヨコバイ、カメムシの幼虫といった、稲の害虫も彼らの餌食となるので、おのずと農薬の代わりを担っています。

しかし、近年育てる稲の品種によって、オタマジャクシが蛙になる前に、水を落とされるのが多く、夏場になると、田んぼのへりに集団で干上がっているオタマジャクシを目にすることも少なくありません。1匹でも多くの蛙が生き残って大人になって、次の世代の命をつないで欲しいものです。

## ■触ったら手を洗おう！

アマガエルは、体の表面から出る粘液に刺激物質が含まれています。手にぬめぬめ感が残っていたら、目や傷などを触らないようにして、必ず手を洗いましょう。

自然観察指導員 桐原真希